墓にゃ降ります涙の雨が！！

島さち子

墓にゃ降ります涙の雨が！

装画　島　さち子

墓にゃ降ります涙の雨が！

帽子を顔にかぶせて砂浜に寝ると、海が帽子と下瞼の間から見え、岸辺から水平線まで、青と呼べる色が七つも数えられる。左眼ではどの青もくっきりと縞目をつくって、水平線では赤味を帯び、右眼では七色とも陽光の淡い膜を透かして見る感じ、どちらが壊れた眼なのか、ぼくにはわからない。

長々と寝て、頭を固定したまま体の角度を変えていくと、砂浜に波がシュワ、シュワと扇形の襞をたたみ、カラフルなビーチパラソルや水着姿が見え、ヒラメのように平たく寝た眼は、思いがけなく多彩になる。

派手な水着、女の歩き方、腰の曲線、片手に余る乳房の重み……。

一瞬、僕は息を止めた。
砂浜で女が男の生首を抱えて、熱烈なキスを繰返している。悲鳴を飲み込むと、心臓の鼓動が大きくなった。美しい女だ！
よく見れば男の体は砂に埋められているのだ。覗き見したような後ろめたさがきて、眼をそらした。
僕が再び、ものみだかく視線をもどすと、女は男の上に覆い被さって、愛撫しているように見え、男の頭も女の顔も見えない。畜生！　まだやっているのか！　そう思ったとき、砂を被っていた男の体が猛然と震え出し、足がにゅっと突き出した。またまた、何をしてるんだか！　僕が挑戦するように眼を見張ると、砂は激しく左右に揺れ、砂をはじき返すように体が現れ、弧を描いて反り返り、何度かひくひくし、僕が男の飛び起きることを期待すると、それっきり動かなくなった。女も動かない。
卑猥なものを見たような気がして、今度こそ眼をそらそうと思ったとき、女がのろのろと上体を起こし、顔にばさりと長い髪を垂らしたまま、左右に眼を走らせた。男の頭には何時のまにか麦藁帽子が被さっていた。女はその上からかき抱いていたことになる。
「あなた、一眠りなさいね！」
女は呟きながら、砂から出た男の体に又も丹念に砂をかけ始めた。
そばを海水パンツの若者たちが、喚声をあげて駆け抜けていった。

暫くすると、女は静かに立ち上がって、着替えの入っているらしいバックを肩にかけると、片手に紙コップを持って、足早に歩き出した。

女の立ち去った跡には、麦藁帽子と、わずかに小高い起伏が残されていた。

白昼夢を見たように混濁した僕の頭が、とっぴな推理を引き出してしまう。

僕は帽子を吹っ飛ばして飛び起きると、男に近寄り、震える手で麦藁帽子を持ち上げた。帽子は軽々と持ち上がり、驚いたことに、帽子の下には頭はなく、砂がひと続きに盛り上がっていた。帽子を元に戻すと、僕は女の後を追って走り出していた。

女の小さな足跡を、僕の靴跡が踏み潰していく。渚の砂の上、延々と続く女の足跡。

踏み潰すと、足跡が僕に向かって、ざくざくほざいた。僕は女の足跡に、幼い子供のように問いばかりを発していた。

何故、殺したのか？

白昼、しかも海水浴場の、衆目の面前で、何故それほどの危険を犯したのか？

殺すほど憎い男に、何故キスをしたか？

僕は女を追って渚を走った。息がきれる。もつれて走った。

僕の手が女の腕を捕らえた。女が必死で振り払おうとする。

「僕は見ていた！！」
女は挑むように僕を見つめた。
「あの男は、当然の報いを受けたのよ！」
僕は沈黙していた。誰だって何か理由をつけるものさ。
「あの男は、当然の報いを受けただけよ」
僕は沈黙を続ける。誰だって何か理由をつけるものなんだ。
「あの男に乱暴された日、見ていた人は沢山いたのに、わたしを誰一人、助けてはくれなかったわ。あなたは、あの男の味方をしようというの！」
僕を非難し、女の声は憤怒で震えた。
「いや、違うさ！　一緒に逃げよう。そう言いたくて、追ってきたんだ！」
女が後ろを振り返った。海水浴場のあたり、まだ異常な動きはない。
「急ぐんだ！」
僕は恋人のように、女の腕をとると走り出していた。いずれ時間の問題だろう、それまでに出来るだけ遠くに行かなければならない。
岬では、海鵜が岩の上で、それぞれに、とぼけた方向を見つめていた。

この女の弱みに付け込んだら、僕にも運が開けるかもしれない。財産もなく、中小企業の平社員では、先が見えてんだよ。女は僕の思惑がわかったように、大げさな身震いをした。

「放してよ！」

女は僕の腕から必死で逃れようとして、いきなり僕の腕に噛みついた。

僕は女の髪をひっつかんで、脳天に向かって絞りあげた。女は悲鳴をあげて口を放した。歯型が残り、見る間に血が膨れあがった。

「僕は見ていたんだ。きみがあの男を殺すのを！」

僕は言葉の効果をはかった。呆然とした目付きになった女は、密告を恐れたのか、今度は僕にしがみついてくる。

「何故だよ、あんなところで、何故なんだよ？」

僕は聞かずにはいられなくなる。

「何故って？　どうしても、そうしたかったの。命がけの出し物ですもの、わたしは観客にはいてほしかったのよ！」

女の息づかいが聞こえてくる。これで真面目なのだから質が悪い。

「その場でつかまるとは思わなかったの」

「気づかせないのが演技だわ。後で気づいても、わたしと彼との繋がりはない」
「よく言うよ！　人を食った話だな」
僕は女の腕を振り払った、ひどく意地悪なやり方でもって。払い除けても、払い除けても、女は僕を追ってすがりついて来る。
「あまっちょろいな！」
僕は貪欲に舌嘗めずりをした。
女は僕の腕に自分の両腕をからめ、体を寄せて歩いた。もう二度と離さないというように、アメと鞭を上手に使い分けるんだよ、そしたら欲しいものが手に入る。
「アリバイは考えてあるの？」
僕の声がやにさがっていた。
「あの男の被害を受けた女の子が、わたしになりすまして、留守番をしていてくれるの」
女が警戒を解いて言った。
「じゃあ、裏切る心配はないか？　それにしても、犯人だってどうして、わかったんだよ」
「わたしに、残されていたのは消毒臭と、わたしの噛み付いたあとと、土地勘だけ。でも大丈夫、あいつに間違いなかった！」

始めて見せた女の笑顔は、僕を有頂天にさせた。手に入るところに、女はいるのだ。長くて白い喉から顎の線、張りのある唇、いたずらの現場を見つけられた時のような恥じらい。紺色のビキニをつけた、光そのものであるような、伸びやかな肢体。

暴行魔に暗闇へ引きずり込まれていく、女の悲鳴。復讐は計画的に行なわれたのだ。

松林の中で、女の乗ってきたレンタカーが陽光を反射させて光っていた。

女を窓から見えないようにバックシートに寝せ、車を発進させるために、僕は用心深くアクセルを踏んだ。

ハワイのオワフ島、雲一つない紺碧の空の下で、女は純白のウェディングドレスに身を包んでいた。潮風が吹く度にウェディングベールとドレスのフリルがふるふると揺れ、頭上のティアラが陽光を受けて、光の十字架でいっぱいになった。

僕はその隣りに立っていた。現地の子供達が三組、トレーンを持ってその後ろに続いた。野外の礼拝

堂で、二人は膝まずいた。僕らの頭の上で十字が切られ、僕が彼女のあまりの美しさにうっとりしていると、

「人でなし！」

僕の耳元で女が囁き、

「おあいこさ！」

現実に戻って僕もつぶやいた。

僕の脅迫は終わり、口止め料として、女の夫の座を確保したのだ。何も彼もうまくいっているように思えた。冗談からコマが出たのだ。

それは、僕にとっても、思いがけない運命の選択だった。

しかし、その後で僕たちを襲ったのは、お互いに命を狙われているのではないかと言う恐怖だった。突然おそいかかる恐怖の発作。自己防衛の衝動、愛されてもいないのに結婚したという悔恨。

不安は何時もとぐろを巻いていたのだ。

三ヵ月後、妻は死んだ。

僕に前科はない。

駅から近道をとって、公園を横切ると、欅の葉陰が揺れ、木洩れ陽が生きもののように全身にまつわりついてくる。

１５の１６、わたしは四方の表札の出ている石の門を入った。細くて長い私道が続き、家並みの裏、緑の芝生が広がる。

痩身の若い男がこちらに向かって足早に来る。四方夏林の夫、亮太だ。腕時計は午前十時、これから出勤するのかもしれない。

わたしが遠慮がちに身を細めると、男は不意をつかれたように立ち止まった。

「どなた！　用件は？」

用心深い抑揚のない声。

「はじめまして、アネモネの美容部員、林芹子と申します」

「アネモネ、美容部員？　知らないなあ」

男は別世界の人間を見るように、まじまじとわたしを見た。

二十代半ば、浅黒いが、どこかに疲労を残している顔、白眼がやけに白い。
「わたしはアネモネ化粧品から派遣されて、奥様、お嬢様方の美容相談に当たらせて頂いております」
どんな時にも笑顔を忘れない、それがアネモネレディの華だ。
「まさか容貌を、企業の名で管理することになったんじゃないでしょうね」
彼の口元が、皮肉そうに歪む。
「奥様はお美しくていらっしゃいますけど、その美しさを、お化粧は一段と際立ててくれますわ」
「むやみに塗りたくって、無個性にか？」
「でも、化粧をすることで人間は自信を持ち、積極的になれます。私どもといたしましては、お化粧する楽しみを知っていただき、明るく幸福な生活が出来るよう、アドバイス申し上げているつもりですの」
「なるほどなるほど、それであなたは、ごてごて塗りたくって、明るく幸福極まりないというわけ！　思い上がりだな。何を手引きに夏林を探し当てのか知らないけど、その調子で押し捲られては、断りきれなかったに違いない。僕が代ってお断りします、お帰り下さい。あなたのお相手はブスで自信のない女でしょう。うちの奥さんは自信過剰なんですよ。従って、あなたのお力は必要としない。わかりましたか！」
亮太はわたしの前に仁王立ちになって、梃子でも動かない構えだ。

「押し売りではありません。奥様は今日もお待ち下さってる筈ですから……。わたしたちお友達になりましたのよ」
わたしの声が甘えるように鼻にかかる。
「ホホ―、友達になった？　化粧品のセールスレディが何で他人の心の中にまで、踏み込もうとするんだ。……ここだけの話だが、夏林は自殺未遂で入院し、退院したばかり。漸く静かな生活が戻ったところだ。そのもっともらしい口調で、彼女を混乱させないで下さい。頼みますから帰ってくれませんか」
彼は邪魔者を追い払うように、わたしの肩を小突いた。暴力を振るう日常が見えてくる。夏林の恐怖が、今はわが身だ。
「そのことでしたら、伺いましたわ」
「わからない人だなあ。いいか、あれが、あなたに心を開くなんてことは、あり得ないことなんだ。夫である僕にさえ心を閉じているんだから……。あなたは嘘をついてまで、売上を伸ばしたいのか。それとも何か目的でも？」
「そんな！　別に……、奥様はわたしに色々ご相談下さいましたわ」
わたしは色々に力を込める。
「僕ら夫婦のことを？」

彼は若い顔を赤らめ、一瞬ためらう。
「わかってるさ、あれは僕に殺されるとでも言ったんだろう？　殺される恐怖におののいているのはこっちの方さ！」
吐き捨てるように言って後ろを振り返った。その先、庭木越しに白い洋館が見え、夏林が二階のバルコニーから手招きしているのが見えた。
「そういうことか！　でしたら、まあ、奴の相手をしてやって下さいよ。ただし、ことが起きたら、責任はとってもらいますよ！」
亮太は言い捨てると、右手のガレージに入っていった。わたしは立ち往生している、このまま帰えるわけにはいかないのだ。
――アネモネ、レディだって？　おまえ、もっと地に足のついた堅実な職業はないの？――
就職したとき母の声が電話の向こうで、くぐもっていた。
立ちすくんでいると、亮太の車が派手なクラクションを鳴らし、わたしをかすめて走り去っていった。
「芹子さんは自由で羨ましいわ。わたしも思いっきり変身して見ようかな。つけマツゲやマニキュアも教えて下さる。それから、あなたみたいなヘアスタイルにして……。劇団にいた一ヵ月は、稽古だから、

メーキャップも何もなしで……」

四方夏林は、三面鏡の中からいたずらっぽく微笑む。

二十一歳、きめの細かい透明感のある肌が、標準的な顔の造作に美しさを付加し、わたしは良質なキャンパスに向かって腕を振るう画家の気分になる。舞台女優の卵だったという、若い女は暴漢に襲われ、世に出ないうちに挫折したといった。煽情的な歩き方で身をくねらせる方が悪い！

カールを巻く手を休めると、夏林が鏡の中で脅えたような眼を上げてわたしを見ていた。

「あなた、さっき亮太と何を話していらしたの？」

「別にどうってお話ではないわ。ただご主人はわたしを良く思っていらっしゃらないみたい。ことが起きたら、わたしの責任ですって！」

わたしは軽く言って、首をすくめて見せた。

「そう、見られたんだから、仕方ないけど、彼はわたしがおかしいんじゃないかと真面目に思っているのよ。退院して以来、下坂多恵子、ほら、あの家政婦に、亮太はわたしを一日中監視させているの」

見られたとは？　秘密を打ち明けるには大きすぎる夏林の声は、わたしを落ち着かなくさせる。

「自殺予防のために？」

言ってからわたしは口を押さえた。

「ええ、でもそんなの口実よ。わたしが自殺未遂に追い込まれたのは、妄想なんかじゃなかった。何時も誰かに命を狙われつづけて、神経が参ってしまったからなの。今だって誰かに……」
夏林はわたしをじっと見てから、立ち上がると、足音も立てずにドアまで走った。ノブに手をかけ、呼吸を計るようにしてさっと開くと、家政婦が当惑したように立ちすくんでいた。
「やっぱり、あなたね。スパイするつもりなの？」
夏林は嫌悪の情を隠さない。
「出掛けて来ようと、ドアをノックしたところですわ。びっくりしたのはこっちですよ」
多恵子は落ち着きを取り戻して、やり返した。豊かな黒髪を後ろにゆるくまとめ、意思の強そうな角ばった顔、三十歳後半くらいだろうか？
「どなたかが、奥様に無断で着たとおっしゃる例のお洋服、洗濯屋に出して参りますからね。コーヒーは、リビングに用意しておきます。林さん、お待ちしていますから、お早く御用をすませてお帰り下さい」
下坂多恵子がわたしを見て目配せをした。
「そんなこと、あなたの指図することじゃないわ。早く出て行って！」
夏林が不快そうに唇をとがらせる。家政婦の足音が、遠ざかって行った。

「外出だなんて珍しいことね。必ずどこかで見張っているのよ。それに、亮太は愛人にわたしの服を勝手に着せるんですもの……」
夏林が身震いした。
「愛人が、ここに？」
「新婚旅行にまで、つきまとったあげく……。この頃は、夜、堂々と女を引き入れているみたい……」
彼女の眼のなかで涙が盛りあがり、昼の光に割れてはじける。
「わたし、驚いて逃げ帰ったから、女の顔は見ていないけど……離れで寝起きしているわ。このままでは自殺しなくても、やがて、わたし、禁治産者にされるか、殺されるのが落ちなのかもしれない」
新婚三ヵ月だというのにこの女は、本当に破局に立っているのか？
「でも、彼、わたしに自殺されては困るのよね。世間体や、保険のことがあるでしょう！」
彼女が人懐っこい笑顔を見せた。
「時には外の空気を思いっきり吸って、気分を解放なさったら？　わたし、明日お迎えに伺いますよ。きっと、解決の糸口が見つかると思うわ。監視されていても、若いんですもの、その気になれば下坂さんの隙をみて外に出るくらい、簡単なんじゃないかしら……」
「確かにそう。だけど、わたしが今度この家を出たら、家も土地も丸ごと奪われてしまう、そう思えて

ならないのよ。別に金や土地にこだわったことはないけど……。それに、この間の自殺騒ぎで、ご近所の目が怖くて外出する勇気も出ないんだから……。でも、あなたが力を貸して下さるなら……」

「そう……」

「もともと、わたし駄目なひとなの。ただ、もう、彼が怖い。あなた笑ったわね。でも本当なの、ほら、何々恐怖症ってのがあるでしょう。先鋭恐怖症とか、不潔恐怖症とか、そういった恐怖観念によるものだって先生はおっしゃるのよ。彼に肩を抱かれるのが我慢できない。わたしは狂ったみたいになるらしいの。新婚旅行で彼の腕から抜け出したのよ」

彼女は自分をさらけだしてみせた。

「本当は彼を嫌っていらっしゃるの？」

「憎んでいるわ。だって、何時どうなるかわからないもの」

夏林はさらりと言ってのける。

「わたし時々夢を見るの。凄い力で頭と手足を押さえつけられて、口や鼻からさらさら砂が入り込んできて、もう、息が出来なくなって、それで飛び起きると、砂を吐いたわ。気のせいなんかじゃなかった……」

「彼の仕業だと思っていらっしゃるの？」

「彼しか考えられないのよ」
「なぜ、そんな嫌がらせを？」
「わたしに、忘れていないって、おどしをかけているのね」
鏡の中から夏林がじっと、わたしの反応を見ていた。
青く染まり、更に紫色に変色する瞼から目尻へのシャドー、つけマツゲで三倍は大きくなったと思われる眼。見る男を狂気に駆り立てかねない唇の弧。野性を表現する、描き加えられた太い眉、強調された鼻筋、揺れるカール、動的な二十一歳へ。
夏林は口にしていたことの重大さも忘れ果てたように、変身した自分に見入っていた。
「お美しいわ、彼を取り返すのよ！　本当はお好きなんでしょう？」
わたしはソファ―に座ると、ゆっくりと、汗を拭った。快い疲労が全身を浸してくる。抱擁恐怖症の女に結婚生活が可能なのかどうか？　この女の迷い込んでしまった陥穽の深さ……。しかし、所詮、自業自得なのだ。だが、またも口先で言ってしまう。
「この変身がきっかけで、何もかも、うまくいくと思いますわ」
夏林が不思議な生物を見るようにわたしを見た。
「あなたは亡くなったご主人を、信じていらっしゃるの？」

「それは……」

彼女はわたしを残して、階下に降りていった。わたしは平凡な看護師だった彼を今でも信じているから、どんな中傷にあっても傷ついたりはしない。でも、あれだけは黙って見過ごすわけには、いかないのだ、わたしの為というより、彼のために……。

夏林が女優気取りで上がってくる。

「……額に布も当てないで、お棺に乗せて運ばれた、ヘイノン、ノンニ、ヘイノンニ、墓にゃ降ります涙の雨が……。これわかります？　ハムレットのオフィーリアよ。わたし、オフィーリア役で出るはずだったの……それなのに……」

女は名優のように派手に涙を振り払う。わたしにはその一言から隠れている言葉を嗅ぎ取ることができる。劇団の稽古で遅くなった帰路、彼女は暴行魔に襲われたのだ。

わたしは首を振ると、テーブルの上に置かれたコーヒーカップを受け皿ごと持ち上げた。ガラス窓越しに見える、空の頭には、帽子のような白い雲が乗っかっていた。

この時になって、わたしの中心に向かって、慄えが気でも触れたように集まってくる。

落ち着くのよ、わたしが慌ててコーヒーを飲み込むと、暖かい香りが、ゆっくりとわたしの内臓にしみこんでいくのがわかった、下坂多恵子は待ちくたびれているだろうか？　標準はしぼられたのだ……。

同情などいらない、この女は言ったのよ。
「暴行魔の妻のツラが見たい！」
などと。

あたふたと服を着替えると、化粧品を詰め込んだアタッシュケースをもち、玄関のドアを開けて外に出た。
むせかえるような青葉の匂い、深呼吸をすると、肺葉の隅々にまで緑の風が満ちてしまう。
帽子を目深に被り直すと、角の八百屋の老婆が掛けていた眼鏡をとってわたしを見た。肉屋の店頭には牛の枝肉が運び込まれ、魚屋では魚たちが三角の頭を並べ、堅い死の床で見果てぬ夢を見ていた。銀行、楽器店、１５の９、欅の葉陰が揺れ、わたしの水色のプリーツスカートが風をはらんで生きもののように膨れ上がる。
十一時十分、下坂多恵子はどこで監視しているのだろう。眠り込んだ彼女を一人残してきたことで気

が咎めたが、駅前の繁華街まで、鬱陶しさを振り落として全力で走った。
こんなことは小学校の運動会以来、母はわたしが一等賞になったことに驚いて泣いた、あの頃の母は離婚して気が弱くなっていたのだ。
駅前のポストに手紙を投函すると、売店でサンドイッチと缶ジュースを買い公園のベンチに腰をおろした。
心地よい風。さっきまであの古い家の中で我慢していたことが夢のようだ。隣のベンチでは、変に身綺麗な浮浪者が古新聞をひろげて金を数えていた。
男は時々警戒するようにわたしを見る。水色の制服が目立つような気もするが、気にしているのは彼だけなのかもしれない。
サンドイッチをゆっくりと口に運び、ジュースを口に含むと、急に眠くなった。隣りの住人に習って、わたしも、なりふり構わずベンチに横になってみる、いい気分だ。
こうしていると、財産も夫もなく、家族も、職もない、そんな自由さこそ貴重なものに思えてくる。結婚生活など、所詮、互いに傷つけ合うだけ。
どの位、眠ったのだろう。立ち上がると身長が急に伸びたような気がした。日常のリズムが戻ってくる。何日ぶりだろう、気ままに店を覗き歩き、書店に入った。わたしはとりどりの色彩に眼を回し、印

刷の匂いを嗅ぐ。この知的なものへの飢え！

わたしが、うず高く積み上げられている新刊書に手を伸ばしたとき、道路を消防自動車がけたたましい音を響かせて過ぎていった。わたしの気がかりと、呼応するようなサイレンの音、本を差し替えていた店員がいち早く道路に飛び出していく。

「六丁目か五丁目かなあ、わあ！　煙！　凄い煙がもくもく出てるよ！」

火事……五丁目……。わたしは反射的に駆け出していた。

火事は四方家に違いない。もうそれは確信に近い。化粧はしていても、眠ってしまった彼女の頼りなさそうな寝顔が、足のひと蹴りごとに信号のように点滅した。

そんなつもりではなかったのよ。わたしは、見過ごしただけなのに……。

汗が眼を洗い、頬を濡らして流れ落ちる。サイレンの唸り、回転灯がくるくる回り、道路は完全に遮断された。

見ると、十六番地の町並みと騒音の上に、青白い煙が夏雲のように立ち上がっていた。

「ちえっ！　これが夜だったらなあ、どんなに綺麗だったろうに！」

若い男がわたしの耳元で指を鳴らした。

前方、消防車が七八台、消火活動もしないで立ち往生している。

「私道が狭くて、消防車が入れないんだそうだ！」
「表も裏もか？　じゃ、燃え放題じゃないか！」
「通して下さい！　通して！」
わたしは人々を掻き分けようとして、押し返される。ホースを抱え込んだ消防手が四五人、家と家の間にくぐり込んで行った。
「火元は四方さんだそうよ。お気の毒に御難続きねえ！　お祖父さまとお母さまが亡くなられたとき、相続税を捻出するのに困って、道路側の土地を売却したんですってね。だから消防車が入らなくて、このありさまよ……」
野次馬達の言葉が容赦なくわたしの耳に入りこんでくる。
「あの家は昼間、お留守なのか？」
「若主人は会社にお勤めだそうだが、ほら、この間、救急車で運ばれた自殺未遂の若い奥さん、家付き娘がいるはずだよ。可愛い感じの美人でさ、でもこの間見たときは、こう、鬼気迫るって感じだったな……」
「なら、今度は放火しての自殺かな？　全く人騒がせだなあ！」
「さあ！　どうかな？　家政婦が夜遅く買い物に来るが、あの女はどうした？」

ふと家政婦の下坂多恵子の眼が近くから、わたしを見ているような気がして身震いした。
今、逆巻く炎のなかで、髪を逆立て彼女が助けを呼んでいるのだ。外から鍵を掛けて出た、もう、どんな弁解も通らない。
消防車は、周囲の家から先に水をかけ始めた。類焼を防ぐ手立てしか、最早残されていないとでも言うように。そんな！
風が出たのか、煙が流れ出し、真昼の空に炎が勝利したように舞い上がった。
わたしは後退りし、次の瞬間、恐怖から脱兎のように逃げ出していた。

わたしが、自分を取り戻したとき、叩きのめされたように、くたくたになって見知らぬ駅のベンチに腰掛けていた。
四方夏林は死んでしまったのだ……、しかし、わたしは生きている。このぎこちないへだたり。
駅の時計はすでに午後四時半を回っていた。わたしは保身の手掛かりを求めて、ポッケトの中をかき

回し、思いつきのように定期入れを取り出し、職場に電話を入れるという、ごく常識的な行為をするために携帯電話を探った。

「こちら、林ですけれど、今日ちょっと戻れません、体の具合が悪くてこのまま……」

一気に言ってしまう。それに続く苦しそうな喘ぎ、胸が苦しくなる。

「四方さん、あなた四方さんね。大変よ！　刑事さんがお二人、あなたの帰りを待っていらっしゃるのよ。何があったの？　何かしでかしたの？　四方夏林さんのところに訪問したのは何時頃だったの？　大変よ！　あなたが四方さんから出たあとで、火事になって、その夏林さんが、焼死なさったのよ！　聞いているの？　あなたのやりかたが、お客様を自殺に追い込んだんじゃないかって言われて、部長や課長がかんかんに怒っていらっしゃるのよ。アネモネレディが警察沙汰だなんて、前代未聞ね！」

「……」

声が出ない。

「何でも、四方さんのご主人は、あなたに帰ってくれるように、きつく言ったのに、無理やり押し入ったとおっしゃるのよ。あなた、ことの重大さがわかっているの？　売上を上げるだけが能じゃないわ。わかったら早く社に戻っていらっしゃい！」

中年の女の声が電話の向こうで毒をもってがなりたてた。やはり、彼女は脱け出せなかったのだ。だ

から刑事がきている……。
「どうしたの、驚いてる場合じゃないでしょう」
「でも、わたし、何も……」
「ほんとに、自覚も何もないんだから。とにかく、いまどこです？」
「わたし、気分が悪くって、とても帰れそうも……はい……」
「じゃあ、仕方ない、刑事さんにはそう言っておくけど、それではすまないんじゃないの。会社としてはこれ以上、事件にかかわり合うのは迷惑ですからね。あなたも……」
わたしは黙って携帯を閉じた。切った後も取り乱している女の声が、何時までも耳の中で暴れ回った。思案し、迷いに迷い、結局、ここに来るより方法もなくて、疲れ果てて芹子のアパートに辿りついていた。
誰かいるのではないか、思わず部屋中を見回してしまう。誰もいないことで安心すると、玄関のブザーが鳴った。二回三回、七回、わたしは脅えてはいたが、テーブルの上の彼と二人で撮った写真を机の中にしまうと、震える手でノブを握った。ドアも開ききらない内に、警察手帳が胸に突き当たった。
後退りすると、刑事が二人、部屋のなかに入り込んでいた。
「林芹子さんですね。四方夏林さんのことで、お話願えませんか、お暇はとらせません。会社には帰ら

れないと伺いましたので、お宅まで参りました。なに、事情さえ、ご説明願えれば、それでよろしいんですから……」
刑事は勝手に上がり込み、ソファーに腰を降ろした。わたしは恐怖でこちこちになる。
「何も存じません。お話するほどのことは何も。ただ化粧品をお届けに上がっただけなんですから……」
「いや、そうでしょう、そうでしょう。焼死と聞いて驚かれたでしょうな。で、あなたは何時に四方家を出ました？」
「はっきりとは……十一時頃じゃないかと……、そうだわ、確か公園のところで時計を見たときは十一時十分でした」
わたしは小さな声で言った。
「今着ているのが制服でしょう。それに帽子、ああ、これだ。八百屋の婆さんの記憶に間違いありませんね。あの婆あ、まだ呆けてはいなかったんだ！」
大崎刑事はソファーの上に投げ出しておいた帽子を手にとると裏返した。
「林芹子。あなたの名前に違いありませんね。この服装のあなたを火事の最中に現場近くで見たといっている者がいます」
「わたしが？　そんなに何回も行ったり来たりしません」

「あなたは四方亮太さんに、用はないと断られたのでしょう。それなのに、四方家に入り込んだ。それには何か特別な理由があったんじゃありませんか。いかがです」
「わたしはご注文の品を届けて、お化粧のアドバイスをしただけです。喜んで下さったんですよ」
「さあどうかな。相手の本当の気持ちはわからんだろう、で、火事場に戻ったのは何故です？」
浅野刑事が口を挟んだ。
「わたしは戻ったりしません。水色の服を着ている人は何処にもいますわ」
本当のことを言っては収拾不能になる。あくまで、アネモネレディの自覚と、分をわきまえること。
「それで、あなたは自殺の怖れのある女一人、あの家に閉じ込め鍵をかけて出てきた。危険だとは思いませんでしたか」
「だって、彼女は……ああ、夏林さんはこれから眠るからとおっしゃったので、危険な者が外から侵入してはいけないと思いました……、それに玄関にそうして欲しいと言うように鍵がぶら下げてありましたから」
「ほう、それは誰が？」
「家政婦の下坂多恵子さんが出かける時に、かけていらっしゃったのだと思いました」
「その鍵はどうしました？」

「外に出て鍵をかけてから郵便受けに入れました」
「どうしてですか？」
「どうしてって、そうしていましたから」
「ここでですか？」
大崎刑事はドアの郵便受を指さした。
「あら、はい、そうなんだわ。自然のうちにそうしたんだと思います」
「で、夏林さんは何故眠くなったのかわかりますか」
「わかりません、急に眠いとおっしゃったので、わたしほんとにびっくりして、慌てて出てきたんです」
「夏林さんが睡眠薬らしいものを飲むのを、あなたは見ていましたか」
「コーヒーを口にするのは、見ていましたけど……」
「眠っていては放火はできない。きみが睡眠薬を飲ませたあと、放火したんだろうが？」
浅野刑事がいった。大崎刑事の射すくめるような眼光。
「いいえ、違います」
眼を上げると壁に貼ってある会社の古びた表彰状が眼に入った。これがわたしのバックボーンだ。わたしは敗北と連立って歩く気はない。

「わたしもコーヒーはいただきましたけど、何ともなかったんです、薬が入っていたかどうかはわかりません。でもベンチで急に眠くなって、もう、どうにも我慢出来なくなって、そんなこと、今まで無かったことです。それに二つのコーヒーカップは、別の模様でしたわ」
「ということは、夏林さんは、愛用のカップでコーヒーを飲んだことになるのかな」
「下坂多恵子さんがコーヒーを入れてあると、出かける前におっしゃったような気がしますけど？」
「ということは、下坂多恵子が怪しいのかも知れないし、冷めていれば、夏林さんが入れ直したかもしれないし、暖めたのかもしれないな。で、飲んで何分くらいで眠いと言いましたか？」
「ほんの、二分くらいです」
三分、いや、五分以上過ぎていたのかもしれない。わたしは眠ってしまった彼女をベッドに抱え上げ、ネグリジェに着替えさせ、着ていたものをクローゼットのなかにしまおうとして、思い直し、そっと戸を閉めると、落ち度のないことを確認してから急いで外に出た。
大崎刑事と浅野刑事がわたしをずっと見つめ続けていた。と言うことは、疑いを持っている証拠だ。
「わたしには殺す動機なんてありません。あの方を殺しても、得なことなど何一つないんですから。お得意様と友達が減るだけなんですよ」
「そうか！　出火したと思われる時間は、一時から二時だが、焦げ臭いとか、何か異常に気づきません

でしたか？」
「そんな臭いがしていたら、彼女を独りにはしませんでした。わたしを疑っていらっしゃるんですか？……」
浅野刑事が薄笑いを浮かべた。
「仕事が終わったのに、何故、駅のあたりをぶらぶらしていたんだ。きみは火事になるのを待っていたんじゃないのか？　犯人は現場に戻ると言うだろうが！」
「だって、わたし、彼女の目覚めたころ、もう一度戻って、代金を戴こうと思って時間つぶしをしていたんです。三時間もしたら伺って、五時には会社に戻るつもりでした」
わたしは容疑からの脱出を試みて、何とかアリバイを証言してくれそうな人間として、身奇麗な浮浪者と、本屋の店員を上げた。
「……そうですか、もっとも夏林さん自身が、あなたを早く帰えらせるために、眠くなったといい、下坂多恵子さんのいないのを好機と、自殺を計ったとも考えられますが？」
大崎刑事が考え深げに言った。
「自殺かも知れませんけど、彼女を殺したいと思っていた人は、何人もいるんじゃないんですか。亮太さんとか、下坂さんとか、それに亮太さんの愛人、みんな怪しいんじゃありませんか、もっとよく調べ

てください！」
わたしは要求する。
「亮太さんはことが起きたら、わたしに責任をとれとおっしゃったわ。ことも起きない内に……、おかしいんじゃありませんか？　家政婦の外出を彼女は珍しいと言っていました。あれは発火装置でも仕掛けて出かけたのではありませんの？」
刑事は顔を見合わせると立ち上がった。
「遺書でも見つかれば、簡単なんだが、みんな疑心暗鬼だな」
浅野刑事が言った。
「ではこれで、また伺うこともあると思います」
……ということは、如何いうことなのか、聞きたかったが、聞かない内に、ドアは大崎刑事の手で閉ざされていた。
ソファの背を倒してベッドにすると、わたしは、疲労した体を横たえた。頭はふんわりと、クッションに埋まっている……。
何時間歩いたのだろう、体中がきしんでいた。

たった一つの窓の向こうで、亡霊みたいな月が、ネオンのきらびやかさに敗退していく。戸締りがしてなかったら、脱出しようと思えば出来た？　そうだろうか。

逃げる前に有毒ガスにやられたのだ。あの部屋の色彩、あれが有毒ガスの発生源ではなかったのか？

退院する前に気分を明るくするためにと、模様替えされた、一見陽気そうな有毒な部屋。何もかも用意周到に仕掛けられていたのではないのか。

誰が先手を打つのか、それが問題だったのだから。狙われたのはわたし、亮太たちはわたしに罪を背負わせるつもりだ。涙が眼を熱くし、頬を冷やして、次々クッションに吸い込まれていく。殺人容疑で警察に引っ張られたりしたら怖い。

明日はこのアパートを出て、マンションに移ることにする。当分集金した金を借りるしかないけど、わたしの財布と合わせれば、暫くは暮らしていける。

わたしは彼らを犯人としてこの手で検挙させたい。その為には、今の内に眠らなければならない、わたしは何回も寝返りを打った。

眠気の残っている額を手でこすると、汗に濡れた柔らかな丸みが、いきいきとある。頬のふくらみ、顎から首へ手の指は若々しい命を呼び起こしていく。

生き残った力強い動物として、何かを決断しなければならない時がきているのかもしれない。昨日のことは思い出さない。わたしのもやもやが消えて、いっさいが明快、単純になった。

シャワーを浴び、化粧品の溢れ返っている鏡に向かって化粧をし、洋服を選び、部屋の掃除にかかった。掃除機のモーター音がわたしにリズムを取り戻してくれる、電話が鳴った。

「ああ、林さんだね、課長の前山だ。きみ、今何しているの。昨日から、何度電話したか知れやしない。どうして電話に出ないんだ。ええっ、それじゃ連絡がつかないじゃないか。聞こえているのか？」

男のだみ声が飛び込んでくる。

「聞こえています」

「まあいい、ところで昨日、刑事が二人、そっちに行ったかい？」

「はい」

「そうか、いや、こっちもきみのお陰できりきり舞いだよ。昨日の会議は大変だった。結果を伝達するよ。当分出社には及ばない。つまりそういうことだ！」

前山の威圧的で含みのある言葉。

「……」

わたしは黙っているしかない。

「どうした？　会社としては社名を傷つけたくないんだよ。つまり、アネモネレディに少しでも犯罪の匂いがしたのでは絶体絶命、訪問しても誰もドアを開けてくれなくなる。それくらいは、きみにだって理解できるだろう？」

「犯罪の匂いだなんて……自殺かもしれないのに！」

「いや、人一人死んだんだ。殺されたとしたら、そういったものだろう。企業イメージなど不心得な社員一人のために簡単に崩れ去るものさ。そうなったら、二千人の社員が飯の食い上げだからね」

「ですけど、わたしは何にも……。いままで、表彰されるほど、会社のために働いて来たのに、運悪く偶然、事件に巻き込まれたくらいのことで、そうも簡単に辞めさせるとおっしゃるわけですか、ひどすぎます！」

わたしは抗議した。

「当分と言っただろう。いつ辞めろといった。勿論辞めさせろという意見は出たさ。そこを何とか当分ということで、僕がどんなに苦労したか、きみは分かろうともしないのか！　きみみたいに綺麗なひとを失うのは僕としても、惜しいんだよ」

前山の声が秘密めいて小さくなった。

「そんなことで、わたし、恩を売られる覚えはありません。どっちにしても、同じだわ……。

こっちの方から辞めさせて戴きます。辞めます！」
口が先行して動き、どこかで思考が省略されていた。
「そうか、これだけ言ってあげても、きみが自分の意志で辞めたいというのなら、願ってもない話だ。人の善意も理解できない人間に、何を言っても無駄だね。それでは今日、ご希望に従って手続きをとる。給料と退職金は口座に入れる。それでいいな！」
前山はこの機を逃してはならないと、てきぱきと処理する。会社というものの非情さにわたしは仰天していた。
「当分出てくるなといい、怒って自分から辞めさせる。思う壺と云う訳ですね……」
「きみは、ご主人を亡くしたばかりだと言うから、いたわってやらなければ、そうおもっていたんだよ。でも、それだけ強ければ大丈夫、……もう二度と会社に来る必要は無いからね……」
わたしは黙って電話を切った。
失職していた。

門を入ると焼け跡の臭気が、雨で湿ったわたしに飛びつくように付着してくる。黒焦げの柱や立木、燃えた家の骨組みが死にきれない人のように突っ立っていた。そのところどころに、雨で黒光りする大目玉があってわたしを睨む。

突然の死に、彼女としても、真相を掴みきれなかったに違いない。バシッと焼けぼっくいが足元におちる。縮み上がると、ヒールが焼け落ちた壁土につきささっていた。

母屋の残骸が積み上げられているあたり、高々と炎が上がり、火の粉が飛び、彼女の髪がぼうぼうと舞い上がる。断末魔の声、両手で耳を蔽うと、持っていた傘がすとんと肩に落ち、心臓に銀色の竿がぐさりと来る。

何もかも……燃え尽きてしまったのだ。

黒い傘に隠れて移動していく。どこに彼女の亡骸があったのだろう？　黒焦げで？　炭化した家は、大きな柩のように、わたしの彼女への思いを拒絶してしまう。

眼をそらすと焼けた母屋の奥、離れがぽつんと焼け残っていた。亮太がいる？　女と一緒に？

雨に濡れた髪や洋服がわたしの体温を奪っていき、寒気がくる。雨なら、誰にも会わないと思ったの

に、彼に見つかってはまずい。
逃げるように歩き出したとき、門前にボロ車が音をきしませて止まり、女が一人降り立つのが見えた。わたしは慌てて引き返し、傘を閉じて焼けた木の後ろに身をひそめた。
女は小花模様の傘を傾けて足を止め、焼け跡を見つめて立っている。背が高い、薄暗くても、その華やかな目鼻立ちがわかる。どうやら、こちらに気づかないらしく、離れに向かって歩いていく。
わたしは柱の陰に位置を変えた。雨が激しくなり、暗くなったせいか、離れに明りが点り、鮮明な影が動いた。急いで近づこうとすると、足が残骸にはまり込んで抜け出せそうにない。
「亮太さん、亮太さんいらっしゃる？　あらあら、あたしの亮太はいるかしら？」
女の声が媚びを含んで、徐々に大きくなった。
「ご主人様は、こちらにはいらっしゃいませんが……」
下坂多恵子の声が女の声を押さえ込んだ。
「……消防の放水でここは水浸しになったんですよ。乾かそうと思いましたのに、この雨で……火事だなんて災難ですわ。でも災難を受けるには、受けるだけの理由があると思いますのよ。仕方のないことです」
下坂多恵子は、油断のならない悪意に、死者まで引き渡すつもりだ。

「亮太さんはどちらに？」
「さあ、ご存知ないんですか。なら、お友達のところかしら？」
「ご不自由ですわね、うちにいらっしゃいと、お伝えください。真希です、真実の真に希望の希、そう言って下さればわかりますから……」
新婚旅行につきまとい、亮太の部屋に出没した女は、夏林の死を知って、今、こうやって堂々と姿を現したのだ。焼け跡にただよう妖気を吸い込み、わたしの怒りは、火達磨のように膨張していた。
「はあ、真希さん？」
家政婦の当惑振りが伝わってくる。
「……どういうご関係なのかと……」
「あなたこそ……」
雨が激しくなり、言葉が聞き取りにくくなった。
「……火事の後始末なら清掃局でやってくれるんですって……トラック八十台にはなる……おっしゃるんですよ。……終われば、わたしも、お暇を戴くつもりですわ」
下坂多恵子が饒舌になった。
「下坂さんでした？　もしかしたら違うんじゃないかと……」

「それはどういう意味ですの。失礼じゃありませんか」
多恵子がきっとなって言った。
「気になさらないで、夏林さんの死因はまだ、自殺と断定されたわけでは……」
この女は情報が聞きたくてやって来たのだろうか。
「自殺だと、わたしは思いますわ。夏林さんは生きていても、どうしようもなかったんですよ。でも他殺ならあの、厚化粧の女が犯人ですわ。林芹子、強引で約束も護れない女。あの日、ご主人と親しそうに話しているのを、この眼で確かに見ましたもの。奥様を邪魔者にして殺したに違いありませんわ」
嘘つき！　わたしは飛び出していって、多恵子の口を封じたくなる。
「でも、あなたは……」
「わたしはアリバイがありますのよ。十時十五分にはあの家を出て、『山茶花』というお店にずっといました。火事にも気づかず、帰って来たときには焼け落ちていましたわ」
「でもよく、夏林さんをお一人残してお出かけになれましたわね。心配ではありませんでしたの」
「まさか、またも自殺だなんて、思っていませんでしたから、約束があったので外出したんですよ。だって、一時も目を離さないで監視するなんて不可能ですもの。ここの土地は大変なものなんですってね。なにしろ、表道りのお店がみんな欲しがって、鵜の眼鷹の目なんですから。あの女が狙ったんですよ！」

下坂多恵子は断定するように言った。
「さあ、どうかしら？　林芹子さんに相続の権利がありまして？」
女が用心深げに言った。
「やはり、疑っていらっしゃるんですね、怒りますよ。家政婦が恨みを持ったとしたら、何時でも目立たないやり方で、憂さ晴らしはできますもの。まずいものを食べさせるとか、お掃除の手抜きをするとか」
「日々小出しに、尽きることの無いやり方で追い詰めた？　凄い方ね！」
「あら、それより御主人を追い駆けているのは、あなたなんじゃありません。確か、何度かお電話下さったのは、あなたのお声でしたわ」
「お気の回しすぎですよ。こんなひどい火事の後では、誰もまともではいられないのかもしれませんわね。では、あたし……」
「わたしも帰ります。焼けてからは、家政婦の派出所に住んでいますのよ。お車に乗せて……」
二人は外に出てきた。わたしは黒い茸のように傘の下に蹲ったまま、震えている腕を引き寄せて時計を見た。午後四時だというのに、夜のように暗い。
「ご覧になって、立木まで焼けましたのよ。生きたまま焼けたのは夏林さんだけではなかったんですよ」

女と歩きながら下坂多恵子が言った。女はそれをジョークと捉えたのか、くったくのない笑い声を響かせる。

ひどすぎるわ！　わたしは呆然と蹲っていた。

誰もいなくなり、見回すと、がらんとした焼け跡を、回りの家の灯がとり囲んで幸福そうに揺らめいていた。誰一人、夏林の死を悲しんでいる者などいないのだ。

わたしはのろのろ立ち上がり、濡れて燃えカスのついた靴を石畳にこすりつけた。

その時、何処かで奇妙な声がした。一瞬、心臓が鼓動を忘れ、背骨が連結を解いて震え上がった。それは叫ぶような、すすり泣くような、男とも女とも、老人とも子供ともつかない動物的な咆哮は、耳をすませば遠ざかり、歩き出すと大きくなる。

亮太の声だと気づくまで暫くかかった。

「あんまりだよう……そうじゃないか……なるなんて……だよお……うお……うお……」

その声は頭上から降りてくるように思われ、見るとさっきまで暗かったガレージの二階に灯がともり、窓が開いている。運転手用の部屋に、亮太は家政婦や客を避けて、寝起きしているのかもしれない。

夏林の死を悲しんでいるのだろうか？　亮太は誰もいないと信じて、恥も外聞も無く泣き喚いている

のだ。彼の咆哮がわたしの胸で打ち震えた。
夏林は愛されていたのかもしれない。遅すぎるわ。夏林はもう死んだのよ。あなたがいくら憐れんでも、死んだものは、二度とこの世には戻れない。
わたしはガレージの壁に耳を押し当てた、彼が号泣しているのがわかる。
何故！　わたしは死後の世界から現世を見ている気分になる。夏林の死んだ後で、殺し方の残虐さにたじろいでいるのかもしれない。死者の怨念を恐れて、ついに気が狂ったのか？
わたしは雨傘をさしたまま、二階の見透せるところまで後退した。
開け放なたれた窓の長方形に、はっきりと、亮太の背の丸みが見え、前屈みに何かに身を寄せて行くのがみえた。彼の影に誰かがいるのだ。角度が変わり、瞬時、女の横顔が見え、彼は女を胸に抱きしめ泣き喚きながら、唇を寄せて回転し、窓の底に沈んでいった。
もはや、どんなに耳をそばたてても彼の咆哮は聞こえてこない。
雨が土砂降りになり、大気中を電流が流れ、近くで雷鳴が響きわたった。

妻が死んだ。黒御影石の墓の表面に、雨のように降る涙が、水滴を止まらせ、やがて複雑な地図をつくり黒々と流れ落ちる。

『運命を他人に押し付けることは出来ないかしら？　わたしの代わりにあなたが死ぬとか。わたしの代わりに、あなたが生きるとか！』

夏林がクスクス笑う。彼女は願望の斬新さが気にいっていたのだ。

僕が返事もしないうちに、何故きみは、往ってしまった？　僕はましな言葉をさがしていたのに……。きみのテンポについていけない僕は、またも独り取り残されている。

「きみが、そうして欲しいなら、僕が死んであげたのに……。何故黙って死ぬ！　しかも、それが、焼死だなんて！　怖くはなかったか？　熱くはなかったのか？　ぼうぼうときみの髪が舞い上がり、熱風が天空に逆巻き、きみは助けを求めて僕を、この僕の名前を呼ばなかったのか？　たった一人で何故先を急ぐ？　夏林ともあろう女が、どうして、そんなドジを踏むんだ！

そうではないのか？　誰にやられた！　誰か、わかっているのか？　どうして、そんなに簡単に死んでしまったんだ！　僕が泣かないとでも思ったのか？　こんな小さな壷におさまって、こんな小さな壷

におさまっていられる、きみじゃあ、ないだろうが！　そうだ、幽霊でもいい、出てくるんだ、出て来い！　恥ずかしがることはないさ。きみの幽霊には足があるなんて、僕には鼻からわかっているよ！」

この世に残存しているのは果たして僕だろうか？　存在感が稀薄になっていく、きみに捨てられて。幸福はあんなに目の前にあったのに、僕には、それを掴む手がなかったのだ。きみは、何時も僕の手をすり抜ける、きみには僕の手が見えなかったのだ。ないものは見えない。手とは何だったのだろう？

きみはこの呪いから脱して、オフィーリアを演じたかった。何故そんなに簡単にあきらめるんだ。あれは、きみのためにある役、オフィーリアは夏林そのものなんだから。暴行魔事件のあとで、混乱したきみは、役を降ろされ、人生の進路を誤ったのだ。そして僕に出あった。

もしかしたら、きみは、僕に殺されたと思って死んでいったのか？　そう信じて死んでいったのではないか？

畜生！　何故だ！　何故そんなことを考える？

こんなにも、もろく、夏林は死んだ。あまりにも、もろい死だから、逆に、僕にもそれが現実なのだと理解できてしまう。

あんなにいきいきと、バイタリティに溢れていたのに！　何故、こんなにも儚い？

孤独になると、感覚がとぎすまされる。

異様な臭いがして、はっと、目を開けると、驚いたことに僕は鳩に囲まれていた。
この墓地に僕の他、人影もなかった筈なのに、この墓に向かって鳩が異常に集まってくる。低空を飛び、僕をかすめ、墓をかすめて舞い降りる。
見ると、どの鳩も喉を膨らませ、逆毛を立てて巨大に膨れ上がり、僕に向かって宣戦布告でもしているように、異様な声で泣き喚く。鳩がこんなにも人間に近い鳴き声をたてるものだったか？
凶々しいものが透けて見える。その声は、恨みを込め何を告発しているのか、ビブラートをきかせて唸りまくるのだ。
何の真似だ！　鳥葬か？
分かっている、ねらわれているのは、この僕なんだな。そばにあった寺の竹竿で追い払おうとすると、凄い力で押し返される。鳩にこんな力があったとは？
誰が鳩に平和のシンボルなどという虚名を与えたのだろう。まさか、夏林が鳩に変身したのではないだろうに！　夏林は鳩にはならない。夏林は泣かなかった。
鳩は泣いているのだ、涙雨が四方家の墓に降りかかる。雨のしぶきで目が見えなくなった。僕はゆっくりと体を起こすように、鳩に押し捲られた心を起こした。

その瞬間、僕の足は心や体から逃げだし、先頭をきって走っていた。
「待ってくれ！　助けてくれ！」
いくら叫んでも、足は勝手に走っていく。出遅れた僕が振り向くと、鳩は雨空を埋めて一斉に舞い上がった。

警察の取り調べ室に入ると、僕が殺人犯であるみたいに、やましさに占領されそうになる。
山羊顔の大崎刑事と、狸顔の浅野刑事が入ってくる。
「やあ、焼死体からやはり、睡眠薬が検出されましたよ。夏林さんは睡眠薬を常用していましたか？」
「さあ、つかっていたかもしれないし、いなかったかも？　僕にはわかりかねます」
「睡眠薬が何処に保管されていたか、ご存知ありませんか？」
「はあ、家政婦にまかしておきましたので……」
「何も知らない？　夫婦のことなのに？　となると、お二人はうまくいっていなかった。そう言うこと

になりますか？」
狸が口をだした。僕は質問を予想してここに来ていながら、口ごもってしまう。
「新婚三ヵ月で夫が離れで生活していたというのは、ただごとではないな……」
山羊が顔をあげて僕を見つめた。
「ああ、それは、しかし、関係ないんじゃ……。僕が彼女を失って悲しんでいないとでも？」
僕は八つ当たりしていた。
こんなことになるとは？　それが分かっていれば？　いやわかっていたのかもしれないが？
僕の知っている夏林は、殺しても、殺される人間ではないんだ。嫌、なかったんだよ。断じて！
それなのに、もう、ちゃっかりと、墓のなかだ。何かが間違っている、あの若さで！　その明るさで！
何かが狂っている。僕をおいてけぼりにして！
「僕達は知り合ってから、結婚まで、七日しかなくって、だからあ、三ヵ月間は調整期間にあてることにしていました。僕達なりにうまくいっていたんです」
僕は反論を試みる。
「うまくいっていて、自殺未遂かよ！」
狸が切り込んでくる、さすがに目が鋭い。

「あれは本心から自殺するつもりなんか、なかったんだ。家政婦が慌てて救急車を呼んでしまったから、大騒ぎになったもので、彼女としては、僕の反応を見ようとしただけだったんだから」

僕が言い終わらない内に、狸がおっかぶせた。

「本人がいないと思って、勝手なことをいうんじゃないぞ！　その証拠に、きみは退院してきた夏林さんを、家政婦に終日監視させていたじゃないか。それに結婚をそうまでして急がなければならなかったのには、なにか理由があるんだろう！　彼女が死んで一番得をするのは、きみなんだからな」

「自殺未遂のことなら、僕じゃない、主治医がそう説明してくれたんです。その後のことは注意するようにとだけ。それに僕は、家政婦に注意してほしいとは言ったが、監視させた覚えは無い！」

僕の力が抜け落ちていき、話すのも苦痛になる。

「林芹子さんが犯人だとこの前、きみは言った。しかし、芹子には動機がないんだ、彼女にきみはことがおこったら、責任をとってもらうと言った。ということは、火事の起こる二時間前にことの起こることを予見していたことになる。しかも、その三ヵ月も前から離れで生活し、火災保険にも、終身保険にも入っていた。まるで超能力者じゃないか！」

山羊が珍しく非難する口調になった。

「偶然です。結婚するに当たって二人で新婚旅行に行く前、空港で勧められて保険に入ったんです。だ

って、飛行機が落ちるときだってあるでしょう。お互いに何かあったらと心配していたんだと思います。いいえ、そう言う意味でなく、何処までも一緒にいたかったからです。もしも、一人残った場合の生活の担保をしてあげたかったんです。その時は、ぼくの死しか考えていませんでしたから」

疑い出したらきりもないさ。それにしても、揃いすぎているな！

「夏林さんは焼死した、もう、邪魔者はいなくなった。だからって、警察を見くびっちゃいけないな。たった一つ、きみの思惑のはずれたのは、アネモネレディの訪問だった。きみは驚いて追い返そうとした。しつっこくだ、普通その程度のことで、男はそんなにからんだりはしない。しかし、この女にも使い道があるかもしれないと、きみは途中で考えを変えた。その証拠に火事の直後、林芹子が怪しいと申し立てた」

「疑心暗鬼だな！　僕が、夏林を殺すつもりなら、なにも結婚することも、なかったじゃないか！」

僕はやけっぱっちになって言った。

「そうか、きみは、その為に、好きでもない女と常識はずれのやり方で結婚したんだ。結婚の目的は分かっているじゃないか！」

狸が嘲笑するように言った。怒っては駄目だ、相手は僕の反応を待っているのだから……。

「刑事さんは僕を疑っていられるんですか？　僕には放火する時間はなかった。十時に家を出て十時二

十分には会社に着き、火事の知らせの来るまで一歩も外に出ていない」
「出火原因は、漏電その他、電気機器による失火の疑い、煙草の不始末は否定された。勿論、時限装置も発見されていない」
狸は慎重に言葉を選んだ。
「なら、マッチかライターで火をつけたんだ。だとすればやっぱり、アネモネレディに決まっているのに、何故、彼女を逮捕しないんです。彼女はもう、アパートにはいませんよ。逃げているんだ！」
「何のために、何の利益があるんだ！　彼女は巻き込まれただけだよ」
狸が繰返した。
「そんなこと知るか！　こうして時間つぶしをしている間に、調べたらいいじゃないか。夏林は殺されたんだぞ！　どんなことをしても……」
僕はふてくされる。
あの我侭いっぱいの顔で、夏林は僕の中で泣きつづけていた。どうして欲しいんだよ！　何故きみともあろうものが、そんなに簡単に死んだりするんだ！　言って、僕は僕に先んじていた自分に突き当たる。
「火元は夏林さんの部屋のクローゼットのあたり、または、直下のキッチン回りだ。出火時間は一時か

ら二時。心当たりはありませんか？」
暫く黙っていた山羊が言った。
「なんです？」
「発火装置さ、きみは登山の趣味はないか？」
狸が勢いづいている。
「そんなこと、僕の知ったことか！」
刑事が一人入ってきて、何か相談を始めた。警察は何か重要な物的証拠を握っているのかもしれない。
僕の恋がどんなに不様であるにしても、僕がこの胸にしっかりと抱きしめたかったのは、夏林そのものだったのだから……。
『あんなの、人間のくずよ！』
僕の腕の中で彼女はいった。大きな目がきらきらと輝いていた、穢れの無い幼女の目だ。
死体は翌日になって発見されたのだ。海水パンツ一つで、所持品も無く、前日の不特定多数の海水浴客から有効な情報が寄せられなかったのか、その後、僕の見ている新聞やテレビを賑わすことはなかった。
『殺されて当然のことをしたんだから』

夏林の思惑は当たったのだ。僕は暴行されている夏林を思い浮かべるだけで、それを当然と納得してしまう。僕は刑事とは違う、それ以上聞き出す必要はなかったんだ。

夏林のアリバイ作りをした少女は、僕と顔を合わせるのを嫌って裏口から出て行った。僕に脅迫されないためにと夏林が気を配ったのだろう。

思い巡らしていると、山羊の顎が突き出した。

「夏林さんは夜、凄い力で手足を押さえつけられ、目や鼻や口から、さらさらと砂が入り込んできて、もう、息が出来なくなって、飛び起きると、自分の口から本当に砂を吐いたと、話していたと、林芹子が言っているんだが？」

またも林芹子か、そこまで夏林に食い込んでいたとは？

「そんな夢をみたとか、錯覚を感じたとかいうことですか？」

「いや、本当に砂が出たんだ、眠りながら砂を相当量、飲み込み続けたのではないかと、心配していたと……」

「そんな、真面目にそれを信じたんですか？　砂を入れたら目がさめるでしょう？」

「眠る前に安定剤や、睡眠薬を飲むのを知っていて、誰かが？　それが自殺未遂の原因になったと、主治医にも訴えているんだが……」

「だったら、薬を避けるのが普通でしょう」
「夜、夏林さんに接触できたのは、きみと、前からいる家政婦と、きみの愛人ということになるな」
狸がまたも口をはさんだ。
「困るなあ、警察が、どこから、愛人をでっちあげるんだか？」
「それでは、新婚旅行に、つきまとったのは誰なんだ？」
不安が落ちてくる、僕は熱に浮かされたように狸を見つめる。
「……あれですか？　やだなあ、あれは僕の母ですよ。正確に言えば、義理の母ですが。ぼくたち急に結婚することになって、しかも四方の性を名乗ることで、入院中の父には反対されたんですけど、義母が説得してくれたんです。それで、夏林の希望で、結婚式も二人だけでやる約束でしたが、感謝を込めて、母をハワイツアーの一員として連れていったんです。彼女に秘密にしたのは、悪かったけど、それでことはすむと思っていたんです。ところが、外国旅行は初めてで、SOS の電話が入る度に、部屋を開けなければならなくなったってわけです」
「じゃあ、婆だとも知らずに、嫉妬していたってわけか！」
「……」
誰がそんなことまで？　狸はおかしそうに笑い声をあげた。

「それで、新婚旅行で花嫁に拒否されても、離婚しなかったってわけか！」

僕は絶句する。このときになって、林芹子に僕自身がどんなに憎まれているのか、わかった気がした。芹子は僕を犯人にしたがっているんだ。夏林ならこうまで意地悪くは、ならなかっただろう。

外に出ると、後ろから誰かがつけてくるのがわかった。

夏林は焼死だが結婚指輪をつけ、歯に虫歯もなかった。死体を確認したのは、僕と、下坂多恵子だが、自殺だとしたら、遺書を残したのではないだろうか。残したとしたらだれに？　僕宛には何も届いてはいない。僕に恨みを持って何処かに送付されているのかもしれない。

靴音は、僕が立ち止まると、消え、歩き出すと、再生した。靴音は押さえられていても、一定のリズムを刻んで、僕の後ろからついて来る。

僕は切れた弦のように、震えながら立ち止まった。

街路樹の柳の網目、警察から出て来た亮太の後ろ姿が行くから、わたしは後をつけていく。

始めは遅れないように駆け足で、あとは彼の振り向くのを心待ちにして。
彼はスーパーの袋を抱え直し、先を急ぎ始めた。明大生命の透明なガラスの向こう、背を向けているのは亮太だ。赤ら顔の男が彼を導いていき、わたしもその後を横歩きする。放火で自殺となっても、保険金が手に入るのだろうか？
火災保険も？　何枚もの書類を並べ、赤ら顔の男の指先が動き、亮太は次々と署名捺印していく。これは保険金交付の手続きをしているのに違いない。遺書について警察が何も触れないのは、警察では他殺と信じているのか。
四方夏林は殺され、保険金が亮太に支払われるのだ。亮太とその愛人が笑い転げる。
わたしは出口に向かって、彼の出てくるのを待ちぶせる。体温の感じられるほど身近に亮太が来て、気づかれるのではないかと息を呑むと、自動ドアが開き、わたしは後ろから来た中年夫婦に外に押し出されていた。
亮太はショウウィンドーの前で足を止めた。マネキン人形と向き合って、異常な熱心さで見詰めている。近づいて彼の様子を見たいが、尾行しているわたしの姿がガラスに映ることを警戒して近寄ることができない。身も心も押し潰されたような、わたしの孤独感が、節操も無く彼の背に寄り添っていこうとする。

背の高い女が彼に近づいた。真希？　肩の大きく膨らんだ赤いブラウスに、銀色の光るロングスカート、腰に細い銀色のベルトを幾重にも巻きつけている。長いスリット、銀色のミール。派手なペンダントにブレスレッド。

直線的にカットされた個性的な髪。彼女は後ろから彼の肩越しに何か囁き、亮太が驚いたように振り返った。亮太は真希の肩に手を置くと、二人は幸福そうに歩き出した。真希と待ち合わせていたのだ。

二人はビルの地下に続く狭い階段を、身を寄せ合って降りていく。

続いて行こうとするわたしの前を、見覚えのある大崎刑事と浅野刑事の後姿があたふたと、駆け降りていった。

わたしは店に入ると、刑事の反対側、真希の真後ろに席をとり、脇にある樅の木にぴったりと体を寄せる。

「うまくいったものね。これほどまでに、うまくいくとは、さすがのあたしでも予想できなかったわ」

真希が笑いながらいう。わたしは拳を握り締めた。

「まあね！」

亮太が多分鼻をうごめかしている。

「あら、あなた、随分げっそりしたんじゃなくって、痩せたわね。そうかあ、でも、夏林なんかいなく

たって、ママがついているんだから、元気を出して！　そうだ、また、一緒に暮らしましょうよ。人生、後ろをみちゃだめ！」

真希の声が潤っている。三十歳前後だろうか？　それとも四十歳？

「派手々々でびっくりしたなあ、もう。警察も義母がこんなに若いことが分かったら、ただじゃおかないだろうな」

亮太が揶揄するように言った。

「警察ではなんといっているの？」

声が低くなった。

「発火装置に目をつけている、まさかママじゃ？」

バンド演奏が始まり、声が聞き取れなくなった。ママだなんて亮太も悪趣味。まるでバーのマダムじゃないの。この馴れ馴れしさ、この女なら同じホテルに泊まっても、尻尾を掴ませない反射神経や機転を持ち合わせていたに違いない。何もかもしてやられたのだ。

泣くな！

「……そのことなら、わたし始めてあなたから話を聞いた後、調べてみたのよ。事件のあった日から三日目の夕刊に、一紙だけ、身元の判明したことを載せていたわ。住所と妻の名前はわかっているけど、

転出を繰返した挙句、住所不明で、なにしろ住民票がないんですもの」
「死んでいるの？」
「さあ、粘って調べてもらったら、住民票は本籍地に送付されていたわ。残念だけど結局、手立てはないのよ」
「でも、何故ママがそんなことまで……ママ、また何かたくらんだんじゃないでしょうね！」
亮太が咎めるように言った。
「もとの住所にお手紙を出しただけよ。たくらんだなんて、あべこべじゃなくって！」
「そんなことをしなくても、二人が楽しくやっていけるだけのものは、あるんだからさ！」
わたしは身を寄せていた樅の鉢植えの陰から、思い切って後ろを振り向いた。真希が亮太の脇に席を移し、亮太が身をかがめて、真希の耳に口を寄せていくのが見えた。
「自殺だということになったら、困るというのも可笑しなことね……」
もうたくさん！　わたしが店を出ようとすると、刑事がつかつかと二人の席に近づいて行くのが見えた。警察は林芹子から矛先を真希に移したのかもしれない。

車が渋滞をはじめ、横断歩道までふさいで車が連なっていた。わたしがアーケード街の通路を歩き出すと、わたしの尻にドーンと、何かが突き当たった。

はっとする、車の鼻が椅子の形にわたしの尻を、持ち上げていた。警笛ひとつ聞こえなかったのに……。

きっとして振り向くと、運転している女が、くったくのない笑顔を見せる。真希！　車はゆっくりと動きだした。当て逃げする気だ！　わたしは車を追って走った。練馬ナンバー、あとにつづく数字が読み取れない。

「その車！　赤い車！　待って！」

わたしが必死で叫んでも、誰も関心を掻き立てたりはしない。車が走り、わたしもマラソン選手のように車道にそった歩道を走る。車は再び渋滞しはじめ、ガード下から大通りに向かって、鼻を突き出して連結し、わたしは難なく赤い車の後ろにつけた。

当惑した真希の顔が、振り返ってわたしを見ている。またも車が走り出し赤い車はわたしを残して、走り去る。わたしは歩道に置き去りにされた捨て子みたいに消沈してしまう。何のために追いかけたの

か、自分でもわからなくなる。
「お怪我なさったのでしょうか？」
真希が歩道をこっちに向かって走ってくる。
「それは、まだわかりません？　これから、痛くなってくるとおもいます」
「なーんだ、損しちゃったわ。あんなに、しつっこく追いかけて来るから、心配しちゃった！」
三十メートルほど行った所に赤い車がとめてあるのが見えた。
「それより、あなた、謝るべきでしょう！　あてたのはあなたよ！」
わたしは表情たっぷりに抗議する。
「あたしの方には何のショックもなかったのに……。変ね！　新車だから、ちょっと距離感がつかめていないのかも。でも、車道の真中を、ふらふら歩いている方が悪いのよ。注意なさい！　死んでからでは遅いよ！　それに、あなた、車より早く走れたじゃない。とぼけないでよ！」
「やはり、自信ないのね。当たった興奮が収まる頃、麻酔がきれたみたいに、痛くなるんです」
「一体、あなたは何もの？　わざと当たっておいて、大威張りね」
真希が顔を引き締めた。
「その車、お幾らくらい？　他人の保険金を当てにして、お買いになったんですか？　この前はボロ車

に乗っていらっしたのに。あなた、亮太さんのなんなんです？」
わたしは唐突に言って、あからさまな敵意をこめる。
「そうか……、あなたはあたしを待ち伏せしていた、そうなのね。お名前は何とおっしゃるの？　言えない、とすると、そのお化粧は……あなた、林芹子さんね。そうじゃありません？」
真希の目が光り、わたしにぴたりと吸いついた。
「どう、図星でしょう。あなたのことは、亮太さんや、下坂多恵子さんから色々伺っていますわ。で、あたしになんのご用？」
「あなたは、彼のなんなんですか？」
わたしは又も言って、そわそわする。
「おほほ、ほ……。妬いていらっしゃるの？　さあ、なんでしょうね。でも、それがあなたと関係あって？」
「ごまかしても駄目。わたし、あのお店でみんな聞いてしまいましたから」
「何のことかしら。……なにを聞いたんですって！」
真希の顔が蒼白になった。
「別に聞かれて困るようなことは、話していない筈だけど」

「あら、いやだ。拘置所にいらっしゃる頃かと思っていたのに……」
「残念でしたわね、夏林さんは自殺だったのよ。全く、人騒がせな話ね。警察宛に遺書が送付されていたんですって、昨日判明したのよ。筆跡は間違いなく夏林さんのものだと亮太さんも認めたのよ」
「でもわたし、どうしても、犯人を探し出したいの。夏林さんが可哀想だし、わたし、あの事件のために、刑事さんに疑われたり、職場はクビになるし、さんざんなんですもの。あなた、亮太さんと共謀で……」
「何をおっしゃるのかしら？　夏林さんと最後まで一緒にいらっしたのは、あなたじゃありませんか。あたしに責任があるとすれば、あなたに車をぶっつけたことくらい。いかが、痛みます？
これ、受け取って下さい。どうせ、お困りになっているんでしょう！」
真希は二つ折りにした札を、わたしの手に素早く握らせた。
「何の真似をなさるの！」
返そうとすると、彼女は馴れた手つきで、わたしの手を退けた。亮太を奪い、財産や保険金を狙って、新車を買い、掠めたほどのわたしのいいがかりに、ほいと、五万円も乱発する。この無神経さ。義母だなどと言い逃れにきまっているわ。
「もし、病院で診察をお受けになって、治療を必要とする時には、ご連絡ください」

赤い新車に向かって立ち去っていく、真希の左右にゆれる艶姿を、わたしはじっと見つめたまま立ち尽していた。

時が眩暈のように舞い上がる。もはや、夏林はこの世にない。激情の後で正気をとり戻したということかもしれない。

長い橋を渡り工場地帯に入ると、灰色の風景はざらざらと僕の内部に砂漠を拡げ、舌の上を見る間に砂粒で満たしてしまう。

工場や倉庫に混じって、小さな家屋が並び、堤防沿いに黄土色のモルタル塗りのアパートが、さなぎのようにへばりついていた。

「林芹子さんおられますか！」

僕が言うと、管理人の男は、首に巻いていた手拭をとって、郵便受けの上で一振りしてから、奥に向かって声をかけた。

「林さんお客さんだよ！　今日は珍しいんです、何時もは不在なんだから」
廊下のはずれに見知らぬ若い女が、ひっそりと立っていた。そのもの問いたげな顔。
「あら、どうぞ、どんなご用件でお尋ねいただいたのでしょう」
「あなた、本当に、林芹子さん？」
女は不透明な表情のまま、肯定も否定もしないで、先に立って狭い階段を上がっていく。僕はその後に続くしかない。
「前のアパートの管理人から、連絡先を伺ったので……」
僕は弁解するように言った。女の顔がかすかに揺らぐ。
「そうですか、あたしは江田彩子です」
「江田彩子！！」
僕は驚愕の余り飛び上がった。
真希が調査不能だといった人物を、難なく目の前にしているのだ。ママは何を調査したのか、皆目わからないな。
「わたしは現在、林さんの借りた部屋に住んでいるんです。といっても、地方回りが多くて、留守勝ちなんですけど……」

若い女は気さくに部屋の中に招じ入れながら言った。芹子の友達であれば、聞き出すにはまたとない機会になる。

「お友達なんですね。それではお尋ねしますが、芹子さんには、ご主人がいらっしゃいますか、いや、いらっしゃいましたか？」

女は怪訝そうに僕を見る。

「それでは、今度こそ、本当に同姓同名だな、徹也さんの奥さんではないかと？　勘違いしてしまって……」

「徹也さんですって！」

今度は女の方が声を上げ、困り果てたように、肩をすくめた。

「どこから、そんなことが？　……こっちが苦労しているのに、自分から口を割ってはどうにもならない……もう、しらないから……。悪事露見ですわ、悪いことは出来ないものね。でも、あなた何の目的で、探偵みたいなことをなさるの？」

女のつぶやいた言葉たちは、僕の回りで踊りまくる。

「というと、あなたがやっぱり、林芹子さんか！」

僕はそれに飛びついていった。

「ええ、やはり役者不足だったみたいね。ああ！　どきどきした、でもこんなこと、あまり問題にしないで欲しいのよ。別に犯罪というほどのことではないんだから」

女は開き直る。

「……実はね、最近ご主人をなくされた彩子さんが職を探していて、前に勤めていたアネモネ化粧品を紹介してあげたんだけど、ご主人の亡くなった後、転居を繰り返したために、ご自分の住民票がなくなっていたんです。役所の手違いなんでしょうけど、探してもくれなくて、裁判所にいけとか言われて困っていると……。そこであたしの名前を貸してあげたわけなの。ということは、わかります、部屋を交換して住んでいるんです。世の中にはそんな具合に、自分の名前を偽ってしまう場合があるのよ」

僕はこの善良そうな女の前で、衝撃を隠しきれない。あの自信満々のアネモネレディの厚化粧には、それなりの理由があったのだから。

「よくは知りませんが、住民票は本籍地に戻っているそうですよ」

僕は小さな声で言った。心配そうに翳っていた女の顔が、拭ったように笑顔になる。

「ああ、それで、そのことを知らせに来て下さったの！　運に見放された方には、あまり根掘り葉掘り聞かない、いたわりっていうか、気の使い方が必要なのよ。あなたも彼女に、そうして上げて下さい」

玄関まで送りに出た女は僕に念を押すように言った。

林芹子は、本名、江田彩子で、江田徹也の妻だったとは……。手掛かりを求めてここに来ていながら、その事実の重大さに圧倒されてしまう。彼女はこの友人を欺き、計画的に、名を隠し、恨みを持って夏林に近づいたのだ。今にして思えば夏林の心身の不調になった時点と、江田彩子が四方家に入り込んだ時期は一致していたのかもしれない。そして、砂……。

それにしても夏林が徹也を殺したと、どうして彩子は知ったのか？　誰か僕の他にも、夏林の犯行を見ていた人物がいたのだろうか？　いて何の不思議もない気はするが、夏林を特定するなど、至難のわざだ。

夏林は犯人の消毒の臭いと自分の噛み付いた腕の傷跡だけを頼りに、犯人を探し、暴行魔が少女を連れ込んだところで、少女を助けたが犯人は取り逃がした。少女が眉のなかにほくろのあったことを覚えていたことで、犯人を確認することが出来たと言っていた。

どうして、彩子は夏林に辿りつくことが出来たのだろう？

僕は怒りを押さえ込み客観的立場に立って、その事実を確認しようとする。

どんなに猫を被っていても、注意深ければ、彼女の何気ない目付きや、動作に殺気を感じとることが出来たに違いない。あの日、僕になにか起こるのではと予感させたのは、芹子の殺気だったのだろうか。

僕は今まで、自分の容疑から逃げる為に、芹子を利用しているつもりでいた。おかしなことに彼女が

犯人だなどと信じたことなど一度もなかったのだ。下坂多恵子と口裏をあわせて、芹子だと横車を押し、ガードしているつもりだったのだから。

帰り、僕は橋の上で足を止めた。川の流れは海のどんな青とも無縁に、土砂を運んで澱んでいた。川下に目を転じると、突然、男の生首を抱えて、熱烈なキスを繰返している夏林の姿が浮かび上がった。僕の気がかりは何時もあの日に戻っていく。

家に辿りつくと、四方家の前、少女が私道から奥をのぞきこんでいた。僕を認めると暴漢にでもおそわれたように逃げ出していく。その速いこと！

もしかしたら、夏林が体をはって助け出した少女とは、この子だったのではないか？　僕がそう思ったとき、少女が振り返ってお辞儀をしたような気がした。

夏林に逢いに来たのだろうか？

もう、僕がどんなに目を瞠っても、少女の姿は夕靄のなかに掻き消えていた。

厚化粧の女。家政婦の侮辱的な言葉。女性は化粧品の使用量に比例して自由になっていくのよ。顔をつくり続けると、何時の間にか、自分の顔でない顔が、自分の顔になってしまい、仮面をはいだ顔は恥部のように凝視に耐えないものになる。

この安マンションでは、外出するわたしが、職を失っていようと、いまいと、心配する隣人なんていない。みんな他人に拘わりたくないもの、同時にドアを開ければ、必ず一方が頭を引っ込める。まして、午前三時、誰にも会わないで外に出た。

一面に靄が立ち込め、世界中が迷っている気分がわたしを安心させる。

レンターカーを発進させる。ハンドルの前、林芹子の運転免許証が投げ出されていた。

又も四方家に来ている。

ガレージの二階を見上げると、雨戸がぴったりと外界を締め出していた。視線を移すと、焼け跡は整地され、空気にはもう、火事のくすぶりはない。焼けて立ち枯れた木の間に沈没船のような離れがあり、近づいていくと薄っすら明りが洩れ出ている。乾いて住めるようになったのか。

女と一緒に？　亮太は、もう、夏林のことなど思い出すこともないのかもしれない、まして林芹子のことなど。

事件に揺さぶられて、自分を見失い、だんだん夏林と芹子との境界が稀薄になっていくような気がする。夏林は亮太を嫌ったのではない、亮太が夏林を裏切ったのだ。新婚旅行のホテルで、新婚の夫が時々行方不明になるなど、その度に死ぬほど傷ついていたのは、夏林で亮太ではなかったのだから。

愛しているのに愛されないむごさに、密告されるのではないかという恐怖が輪をかけたのだ。

真希が亮太の愛人であることは、殆ど間違いない。あの派手々々しい服装を剥ぎ取り、髪型を変えたら、それが彼女の正体だとしたら、夏林から、亮太を奪い返す為には、どんな手練手管も厭わなかったはずよ。

新婚旅行の後、彼が離れに移ったのも、彼女の指金だったのかもしれない。

彼を取り返すのよ！　何処かで声が聞こえたような気がした。

朝はまだ動き出さない。わたしは一人ぼっちで怒りに燃え、すぐにも飛び込んで、二人の寝込みを襲いたくなる。亮太の起きている気配はない。縁側の戸を揺する……。

息をつめ、離れを一回りし、裏口に急いだ。

裏口の戸に手をかけて引いてみる。中から鍵がかかっていた。格子戸を叩いた、ガラス戸をかたかたさせ、僅かな隙間に顔を寄せる。わあっと、刺激臭が来て顔をそむけた。塩素系の有毒ガスの臭い。わたしは殴られたようにどきんとする。

石を拾い上げガラスを割り、手を入れて鍵を探った。鼻を刺す刺激臭に鼻孔をふさがれ息が出来なくなる。外に戻り、空気を胸に一杯溜め込んでから、スカーフで口と鼻を覆い、もう一度部屋に戻った。雨戸を繰り、窓を開け放つ、ベッドの下に亮太がパジャマ姿で転がっている。見渡すと縁側の突き当たりに、流し台があって、臭気はそこから発しているのだ。

手がそばにあった笛吹きケトルとコップを突き飛ばした。

咄嗟に洗面器にシーツをかけて包み込むと、庭に持ち出していた。

「四方さん！　亮太さん！」

顔をぱたぱた叩く、脈は？　息は？　人工呼吸をしなければ！　早く吸い込んだ毒ガスを押し出さなければ！　胸を両手で押してみる。何度でも、あせってくる。鼻をつまむ。深く息を吸って止め、そのまま、亮太の口を覆って呼気を吹き込む。口を離して、思わず口を拭った。あの女とキスをした口に、でも続けないわけにはいかない。二回、三回、訓練を受けた時のことを思い出そうとする……。一分間に何回くらいだったのか？　溺れた人とガス中毒では違うのかも知れない。救急車！　そうだ！　誰かあ！　しかし警察は面倒くさくなる。亮太は息をしているような気もするが、酸素吸入が必要に違いない。注射も……。

亮太は鼻に酸素マスクを当てられ、近所の医院に運ばれていった。

「自殺か？　事故か？」
医師がわたしを咎めるように見た。
「洗剤とかびとり剤を間違えて、混ぜ合わせたのかもしれません」
時を測るように、輸液が接続の透明な管の中をぽたぽたと落ちていく。
彼はわたしに気づくだろうか。亮太の寝息が聞こえていた。
わたしは四方家の離れに戻ってみた。まだガス臭が家の中にただよっている。八畳と六畳に縁側、突き当たりに、小さな流しがあって、狭い台の上に、キャンプ用の固形燃料が置いてあり、金属のゴトクの上に、笛吹きケトルが乗っかっていた。何かおかしい、そう思って見ると、ケトルの向きに異和感があった。
わたしは右利きのせいか、注ぎ口は何時も左、これは右。
わたしは洗面器を外に出そうとして、そばにあったケトルとコップを吹っ飛ばした。医師が来たとき、ケトルは床に散らばっていた。今、赤い缶のゴトクの上にケトルは置かれていた。わたしが置いたとして、咄嗟の動作で、何時もと違う向きに置くものだろうか？
見回してもコップは何処にもない。誰かが来て、ケトルを動かし、コップを持ち去ったのか？
改めてゴトクのうえにケトルを置くと、不安定にぐらぐらした。もともと、食事は家政婦が運んでい

たのだ。コーヒーかお茶を沸かすくらいしか必要はなかったのだから……。

七月、亮太が部屋を締め切って置く筈もない。酒でも飲んでいたのか……。それとも睡眠薬。台の下にある扉を開けると、詰め替え用の固形燃料が上段に見え、下段にはトイレ洗剤と、カビとり剤がカラになって投げ込まれていた。

六畳間のクローゼットを開けると、下段に外国旅行用のスーツケースが二つ並んでいた。色は黒と赤、新婚旅行に行くみたいにクローゼットの中で華やいでいる。

わたしはそれを暫く見つめていた。誰と何処に行こうというのだ？　クローゼットを後ろ手で閉めると、八畳間のカーテンがレースのカーテンを残して、隅に片寄せられているのが見えた。

外に出る。ゆっくりと空気を吸い込んだ。金属か石のように堅くなっていたわたしの胸がきしみながら膨らんでいく。

霊というものがあるなら、こんなものなのだろうか？　靄の中を流動する朝の光がうすばかげろうみたいに揺れつづけ、銀色とも金色とも青色とも見え、揺らぎと揺らぎの間に闇をおいて、わたしの首に巻きついて来る。

彼の命を救ったことで、わたしは新しく生きることが出来るだろうか？　今までわたしは彼女の身になり切ろうとして来たが、過去は一人分であり、彼女は未来を持ってはいなかったのだ。

亮太は目をつむっていた。瞼を透かして、眼球が小刻みに動く。眼が開き、わたしの顔の上で迷っている。
「林芹子です」
掠れた声で言った。
「ああ、林さんか。僕、目が悪いもんだから……」
彼は暫く沈黙した後、わたしから目をそらした。
「あなたに、助けられたわけですか？」
彼は、名前を覚えていたのだ。わたしは彼を刺激しない低音を選んだ。
「夕べのこと覚えていらっしゃいます？」
「昨日……昨日は、僕の歓送会でね。中東に行くことになったんです。久し振りに酒を飲んで、帰ったのは午前二時ころかな？」
「どなたか、お家にいらっしたわね。女の方！」
亮太は、夢の中で転落でもしたように体全体を沈み込ませる。
「夢を見ていた。夢の中で、夏林とキスをしていたんだ」

わたしははっとする。

「キスといえば、夏林は僕と始めての夜を過ごしたあと、言語障害になったんですよ。あの夜、彼女は、そんなことをしたら、自分も、あなたも、お互いに偽ることになるからと言って、つまり、愛しているわけではないのだからと言って、キスしか許してはくれなかった。そしたら、翌日、言語障害になったのか、話すことが出来ないと言うんだ。僕は責任を感じてしまって、それで結婚したんです。真面目な話なんですよ。……でも今になって思えば、違ったんです。彼女は、僕の密告を恐れて、自分の目の届くところに、僕をおいておきたかったんだ。その為にはたとえ、財産目当てでもかまわず、結婚も辞さなかった。僕は父が病院に長いこと入院していて、金が欲しかったし、僕の目には夏林は飛びっきり美しく見えた。僕達はキャンセルになった他人の結婚プログラムに乗っかって結婚していた。……ところが、新婚旅行に行って、僕が後ろから彼女を抱こうとすると気が狂ったように恐怖して、以来僕を受け付けてくれなかった。そのうえ、自殺未遂でしょう。あげくに、僕一人残して、勝手に死んでしまった」

「それは違うわ。彼女は乱暴されたとき、後ろから抱きつかれたから、そうされると気が狂ったみたいになるんだと……。彼女は弱味を握られ、いつ密告されるかもしれない恐怖におののいていたんですよ。いや、あなたに愛されたいと、恋をしていたの。……だから、あなたの連れて行った女の影に脅えていた。あなたは女と共謀して、あの家の財産と保険金を奪う作戦にでた！　いいえ、そう聞いています」

瞑想しているように、穏やかに閉じられていた彼の目が、かっと見開かれた。わたしは腕を組んで震えを押さえ込む、彼は再び瞼を閉じた。

亮太は愛人に裏切られて、夏林を思い出したのだ。

「その女は有毒ガスを発生させて、出て行ったのよ。夏林さん殺しの犯人は、今度はあなたをねらった。でも、何故あなたまで？」

わたしは彼の瞬きの一つ一つにも気を配ろうとする。

「夏林に始めてあったとき、彼女は男の首を抱いて、熱烈なキスを繰返しているようにみえた。夏林にはなんと言うか、こう、殺人嗜好みたいなものがあって、それが僕を不安にしたんです。あなた流に言うなら、何時殺されるかも分からない恐怖。それは抱いていても眠っていても瞬時も僕から去ることはなかった。自己防衛本能みたいなものかもしれない」

亮太が鋭いまなざしを窓に向けた。

「今の女は、下坂多恵子だった！」

わたしが窓に駆け寄ると、人影がさっと隠れた。やはり後から来て、ケトルをかけ直した者がいたのだ。

窓から離れると、亮太がまじまじとわたしを見つめ、鳥の爪のように曲げた指を突き出した。「夏林

はつけまつげをつけなかった……」
わたしが反ぱくしようと口を開けると、彼は腕を上げてそれを制した。少しも変わっていない。彼は林芹子を毛嫌いしていた。亮太はこちらなど見るに耐えないというように、しっかり瞼を閉じてから言った。
「変な、声を出すんじゃない！」

ロックを忘れていたらしい。車に乗り込むと、わたしの中でもやもやしていたものが、カークーラーで冷やされ、かちりと結晶する。派出婦会に行って見なければ……。
ギアを入れようとすると、バックミラーの中で何かが動いた。女、下坂多恵子！　彼女はバックシートに身を伏せていたのだ。
「何をしている！」
角張った唾が喉につかえる。

「あなたを待っていたのよ！」
バックミラーは、意思の強そうな多恵子の顎の線を水平に見せている。
「亮太さんも、やられたのよ」
わたしは言ってみる。
「わたしじゃないわ、でも、有毒ガスが出ていたら、締め出したらいい、それくらい知っていなければ生きていけない」
彼女は冷酷に言ってのけた。
「夏林さんを殺したのも、あなたなの？」
優位を競い合う火花。
「何のことかしら、夏林さんを殺したのは、亮太さんよ。だから自殺しようとしたじゃない。辻褄は合っているわ」
冷たいものがわたしの首に突きつけられていた。刃物だろう。
「車を出しなさい。命令よ！」
腫れぼったい眼、三日月型の隈、巻き上げられていた髪は乱れて肩を覆い、何時もより一回り大きく見える体。

「……話は聞いていたわ。行きなさい！　いいと言うまで真っ直ぐに。わたしはあなたのような小娘に馬鹿にされてはいない」
エンジンが唸りをあげ、わたしは乱暴にハンドルを切った。
「あなたには約束を果たして戴くわ」
多恵子が言い放った。
「約束って？」
「汚いなあ。あんなに、泣きながら、わたしに頼み込んだのは、あなたじゃない！　忘れたとは言わせないよ！」
多恵子が激昂していく。
「何を……」
わたしは曖昧に、口の中で呟く。
「あなたは、夏林さんの徹也さん殺しを許せないといって、嫌がらせに五十万、殺したら五千万支払うと言ったわ」
「そんな馬鹿なことを言っていると、この車で警察に直行するわよ」
わたしはあきれ果てて言った。

「願うところだわ、行きなさい！」
彼女の顔が険悪に翳った。
「あなたは何故、あの日、約束を破った！　洗濯物を出して来るからと、口実を作っていつものお店で待っていたのに。あなたはとうとう来なかった……」
わたしは必死で癇癪を押さえていた。
「あなたに頼まれた真犯人の確証は、把握できたわ。その時には決行する約束だった……」
多恵子の突きつけている刃物の先端がわたしの顎すれすれまで突き出されていた。
「危ないじゃない！」
わたしは頭をのけぞらせた。多恵子は戸惑いをみせ、わたしの表情を捕らえようとして前屈みになった。
「見損なったわ、わたし、こんな仕事、始めから気が進まなかったのに……」
彼女は急に肩を落とした。
「そんなにお金が必要なら、夏林さんでも、亮太さんにでも借りたら良かったじゃないの」
「そう思ったのよ、でも、あなたが反対したんじゃない！　わたしに任しておけと！　わたし今日のうちにお金の都合がつかないと、大変なことになるのよ！」

多恵子がわたしの肩にすがりついた。
「いいわ、出してやるから。では報告して！」
わたしは自分の立場を手探りしていた。
「警察は砂に埋めておいて、何人かで押さえ込んで殺す方が、人目の多い真昼の海水浴場では簡単だし、その可能性が強いと話していたわね。でも、夏林さんは、遊びと見せて砂に埋めて、体の自由を奪った上で、コーラに睡眠薬を入れて飲ませ、麦藁帽子を被せて、押さえ込んだのよ。それに違いないわ」
「たとえ、そうだとしても、夏林さんも、亮太さんもそんなことは言う筈もないのに、どうして、夏林さんだと言うことになるのよ！」
わたしは車のスピードをあげた。この女の命は握っているのだ。怖いことはなかった。
「手紙で教えてくれた人がいた、あら嫌だ、あなた宛に、江田彩子あてに手紙を送り、確かめて見るようにと……あなた、忘れたなんて言わせないよ！　わたしは、あなたの隙を見て、コピーしたんだから」
多恵子がコピーした手紙をひらひらさせる。真希だ！　亮太に白状させた真希は復讐をさせるために、江田彩子宛に手紙を送りつけたのだろう。夫が暴行魔とあれば、警察に届ける危険はないと踏んだに違いない。これで手を汚さずに目的が達成できる、彼女は賭けたのだ。でなければ、亮太だが？
「噂ではだめよ。ほかに何か確証がなければ……」

「あるわ、あったのよ、だから、あなたの計画通り実行に移したんじゃない。そう約束させたのは、あなたよ。だから、会ってお話がしたかったのに！」
「確証ですって？　自信があるなら、ここで言って見て、ものによっては、お金は出すわ」
「今の言葉、覚えておくのよ。あったんだから、怖いものね、悪いことはできないものよ。証拠は歴然としていたわ。四方夏林の両腕の内側から胸にかけて、麦藁帽子の網目模様がくっきりと残っているのよ！　本当のことよ、わたし見ちゃった。お風呂に入っているのを覗き見したのよ。びっくりしたなあ、もう！　かなり広範囲に！　あれが、証拠よ！　わたしは見ちゃったんだから！」
多恵子は興奮して持っているナイフを振り回した。
「あなた、笑ってるの？　何故？　あなたは豹変した？　それは夏林さんを、もう殺したからなのね。林芹子、実は江田彩子は、あの日、江田徹也の復讐をした。だから、わたしとの約束をすっぽかした」
わたしは多恵子に気をとられて、信号を見落として慌ててブレーキを踏んだ。
「馬鹿な、殺人をお金で請け負うだなんて、言っておきますけど、あなたの命はハンドルを握っているわたし次第だということ忘れないことね。なんなら、このまま突っ込んで行ってもいいのよ」
空気が揺らめき、煙のような人たちがわたしの前を横断して行った。
「聞きたいなら教えてあげても構わないのよ。あの日、あなたが睡眠薬を入れたコーヒーを飲んで、眠

ってしまった彼女を、わたしは寝巻きを着せてベッドに寝せたの。着ていたものをクローゼットにしまうとき見たのよ、火事の時限装置を！　どきどきしたわ、簡単なものだったけど、あれで成功したんだから……。補充用の固形燃料をアルミ箔の容器に入れ、中央にローソクをめり込ませて立てただけ。わからないとは言わせないよ？　固形燃料は二時間半位は持つのよね、ローソクの燃え尽きる前、焔は固形燃料に引火し、引火した火は一二時間で可燃物に勢いよく燃え移った、証拠は残らなかった。それに、亮太さんのいる離れは、もともと、水は出たけど、炊事などするようには出来ていなかったから、亮太さんは、電気ポットをつかえばいいのに、キャンプ用の固形燃料を使用してコーヒーなど飲んで楽しんでいたのね。亮太さんに頼まれたとしても、買ってきたあなたに疑いはかかる。それは時間の問題ね。砂の実験が、あなたに殺されるという確信を夏林さんに抱かせたのよ。でも、あなたが殺らなければ、わたしが殺られていたわ。あなただって、無事ではすまない！」

バックミラーの中で多恵子の目が充血していた。

「あなたも、金が欲しいだけでよく、そこまで出来たわね。栄養剤だといって、何をのませていたんだ？」

「……」

多恵子はわたしの高圧的な言葉の意味を分かりかねて口をつぐんでいる。

「夏林さんは退院してから、あなたの入れた飲み物は、飲んではいなかったわ。入院中に体調を戻して

気がついたのよ。あなたが、どんなに夏林さんを痛めつけてきたのか思い出したらいいわ。人でなし！嫌がらせまでして、先代からの恩義も忘れ、殺してまで金が欲しいだなんて！」

「何ですって、侮辱は許さない！　暴行魔の奥さんがよくも、大きな口をきいてくれるね。評判の良い看護師が夜な夜な奥さんのストッキングを被って暴行を働いていたなんて、そう何処にもある話ではないわ。可愛そうに夏林さんは、そんな奴の牙にかかってお気の毒でならないのよ。そんな奴は殺されて当然なのに、隠して隠して、横恋慕した夏林さんに、むごい殺され方をしただなんて泣きついてきて、医師だから金に糸目はつけないなんて、貧乏人の弱味につけこんで、人を殺してまで金がほしいかだって！」

下坂多恵子は半狂乱だ。

「あなたにも少しは良心があったのね、安心したわ」

わたしは軽いジャブをおくる。

「厚化粧のセールスレディが、お友達を殺した！」

その不遜さ、多恵子はバックミラーのなかで、わたしを探すように中腰になった。口封じが必要になる。

「あなたは、亮太さんに何をしたの？　ケトルをかけ直したりしなければ、あなただとは、気づかなか

ったかもしれないのに、真希さんは右手でお札を出したし、あなたは左手でドアを開けた。ケトルは左利きの人が掛け直したのよ。何故、戻って来たの」

「ケトルの水を入れ替えただけよ」

「やっぱりそうね、睡眠薬を入れておいたんでしょう！」

「睡眠薬をいれたのは昨日のことよ。あの男はまともな女を愛せる男じゃないわ。わたしは様子を見るために来たのよ。よく眠っていたらお金を拝借するつもりだったわ。そうしたら、先着がいた。あなたよ！」

多恵子がごくりとつばを飲み込んだ。ハンドルを握っているわたしの手が震えていた。

後ろからパトカーの音が近づいてくる。

「撹乱戦術に引っかかって、肝腎のことを忘れてしまうところだったわ。わたしこそ見ていたのよ。わたしが離れのガラス戸を透かして見たとき、あなたは中で、背を向けて何かをしていた。何をしているのかなと思っていると、縁側から出て、今度は裏口に回ってガラスを割り始めた。どういうこと？　……狂言までして、あなたはあの男の関心を引きたかった。そういうことね。自分で有毒ガスを発生させておいて、今度は助けるために飛び込んでいった。あなたは亮太さんの命の恩人になったわけよ。分かってきたわ、あなたは夏林さんを殺しておいて、今度は夏林さんの後窯に座りたくなった。いや、も

ともと……車をとめて！　止めなさい！」
パトカーがピタリと脇につけてくる。
わたしは彼女の矛先をかわすように、体を縮めて、急角度でハンドルを切った。車は反対車線を越え、信号灯の支柱にぶつかった。
多恵子が重心を失って前のめりになり、反動で吹っ飛ぶのが見えた。ブレーキを踏むと車は反転し、ガタガタと震動して、今度はガードレールに突っ込んで行った。わたしは気を失っていたのかもしれない。
気がつくと、バックシートから、下坂多恵子が引きずり出され、救急車に運び込まれるのが見えた。
総てのものから、光が染み出してくるような梅雨開けの外を映して、大崎刑事の手の中で、下坂多恵子のナイフが光っていた。
「下坂多恵子はサラ金に追われていたんだ。危なかったなあ、ずっと突きつけられていたのか！」
浅野刑事がいたわるように言った。
「金は怖いな、怨念と違って、ためらいというものがなくなるんだから……」
大崎刑事が体をすくめてみせた。

四方家のガレージに赤い車がある。真希の乗っていた車も赤、車種も似ていた。一夜明けて亮太は退院したのだろうか。

二人は明日揃って外国に飛び立ってしまうのかもしれない。クローゼットに二つのスーツケースが並んでいた意味！　真希はあの若さで、亮太の父親の長い入院生活に飽いて、亮太に近づき彼との生活を望んだのだろうか。不動産を売り払い二人で高飛びする！

裏に回ると、わたしの壊したガラス戸の穴に手を突っ込んで鍵を開けた。誰もいない。

わたしは六畳間に突き進み、クローゼットの戸を開けた。赤と黒の二つのスーツケースは、体を寄せ、恋人気取りで佇んでいた。

スーツケースを引っ張り出し、疑問に立ち向かう勇気を持って蓋に手をかけた。ロックされていた、スーツケースはわたしを嘲笑し、挑むように赤い。

ふと、誰かに見つめられているような気配がして振り向いた。潜んでいるのは誰？

八畳間、隅に片寄せられたカーテンの襞の間から裸の肌が覗いて、午後の陽射しを受け、匂い立つよ

うにきらめいていた。
「真希さんね！　隠れていても分かっているのよ！」
さっとカーテンを払うと、剥き出しの乳房と女の腕が眼に入った。又もこの女か！　わたしの眼の前が黄色くなった。次の瞬間、テーブルの上に乗っていた果物ナイフを掴むと彼女に向かって突進していった。
ぐさりと、確かな手応えがあったのに、真希はわたしを弾き返し、体ごとわたしの上に倒れ込んだ。遂に来るところまで来てしまったのだ。
ピンク色の長い指は、何かを摘み上げる寸前の形で固まり、首は髪を振り乱し、睫毛の長い流し眼、口を痴呆のように丸く開け、胸にはナイフが突き刺さっていた。
女は苦痛の表情も見せず、無残な姿を自覚してもいない。
わたしは眼を疑った。それは、人形！！
度胆を抜かれたわたしは動けないでいた。カーテンを払ったとき、振り落としたのか、紫色のブラウスがわたしの足にひっかかり、人形の下半身にはぴったりとスカートが張り付いていた。
これが何を意味するのか、次第々々に推理できてくる。夏林に拒否され、その身代わりに、何処となく似ている、この人形と一緒に亮太は此処に住んでいたのだ。火事の後、人目に触れるのをさけて、い

ち早くガレージの二階に移したのだろう。
わたしは始めて声を上げて泣きじゃくった。誰かが入ってきたが、わたしの泣き声はおさまらなかった。
「出会いがなんであれ、僕がきみを愛していないなんて、どうしてきみは考えたんだ！」
亮太が囁いた。
「夏林だろう。僕には分かっていたさ」
わたしは彼の暖かい腕の中にいた。
「ただ、ほんのちょっと、芹子さんと摩り替わって見ただけなのよ……」
彼の手が腰から胸、胸から肩に這いのぼってくる。抱擁恐怖症は夢のように治癒していた。笑いが込み上げる、この一体感。彼の手は肩から首に移動していく、わたしは驚喜していた。これからは誰も、わたしの命を狙ったりはしない。かすかに心が痛むのは、死という傷跡に、わたしの涙がにじむから……。
彼がそっと、キスをした。
「もう、あなたを怖がったりしない！」
彼がキスをした、更にそっと。

二人の前に送り返された未来が、優しく微笑んでいるように、わたしには思えた。
「愛していたのよ、とっても！」
わたしは彼と体を暖め合って眠りたくなる。

彼の指が喉にくい込む。
「手遅れなんだよ！」
荒々しい息が吹きかかり、わたしの目の前が暗くなった。

僕は、倒れている、わかりにくく禦し難たかった女に背を向け、災難にあった人形から、ナイフを抜きとると、傷口に同色のバンドエイドを貼り、優しくいたわりながら赤いスーツケースに移した。お前だけだ！
新婚旅行で花嫁に拒否された男の屈辱を分かってくれたのは、この人形だけだった。新婚の夢に酔っ

ていた僕の腕から、女は唐突に狂乱状態で逃げ出したのだ。後には女の肩を抱いた、からっぽの腕の輪だけが残されていた。女はこの腕から逃げ、自分自身から逃げ出すチャンスを窺い続けていたのだ。

いまさら戻ったと言われても、その空虚はもはや埋められはしない。他のことはともかく、僕は、女が僕の夏林を刺した行為を、許せなかったんだ、決して！！

それに自分のものになる財産を手放す気もない。女はすでに死んでいるのだ。

立ち上がると、裏口のあたりで真希の影が飛び退き、小刻みな靴音が逃げるように遠ざかっていった。

あの色気違いで押しつけがましい女にも、うんざりしていた。利にさとい義母のことだ、父のところに逃げ帰るなら、同罪。暫くは、ここに来たこと見たことを他言しはしないだろう。

僕は夜になるのを待って、女の乗ってきたレンタカーを運転していき、あの砂浜に死体を埋めた。後は穏やかな夏林と一緒に予定の時刻に飛び立つだけだ。

レンタカーを店のそばに乗り捨てて家に帰ると、僕は戸締りをし、二つのスーツケースを引きずって外に出た。

あけの空は七色の層を持っていて地平線で赤味を帯び、どこかで、少女の声が弾けた。

「……ヘイノン、ノンニ、ヘイ、ノンニ、墓にゃ降ります涙の雨が……」

完